はしっこから考える

NPO法人黒潮実感センターは1998年に大月町柏島で活動を開始し、2002年にNPO法人として認定されました。このたびお陰様で法人化10周年を無事迎えることができました。今回これを記念し、これまでお世話になった多くの方々に感謝の気持ちを込めて10年間の活動報告をすると同時に、これから先の10年のビジョンをお話ししたいと思います。

「はしっこ」と聞くと皆さんはどのようなイメージをお持ちになるでしょう？僻地の離島や半島、あるいは中山間地のような場所を想像され、過疎や少子高齢化などの問題を抱え、モノも情報もなかなか来ない、どちらかというとネガティブなイメージをお持ちでしょうか？あるいは豊かな自然に、豊かな恵み。古い伝統や文化が今なお息づく日本の原風景のような場所を想像されるでしょうか？

3.11以降、大量のエネルギーを使用した大量生産、大量消費、大量廃棄で成り立つ現在の暮らしに違和感を持ち、人と人、人と自然とのつながりを求める人が今、増えているように感じます。

はしっこルネッサンス。日本の「はしっこ」から日本の先（あした）を見つめたいと思います。

NPO法人黒潮実感センター長　神田 優

パネリスト紹介

堀上 勝　環境省自然環境局総務課 自然ふれあい推進室長

1965年、東京都生まれ。平成元年、環境庁に入庁。北海道や沖縄の地方事務所と本省を交互に勤務し、国立公園の保護と利用、野生生物の保護業務等に従事。鹿児島県に出向し屋久島や奄美群島のエコツーリズム推進等の業務を経験した後、現職でエコツーリズム、自然ふれあい業務を担当。三陸復興国立公園推進チーム長を兼務。

高橋 宣之　写真家

1947年、高知県生まれ。1973年よりフリーランスの写真家となり「波」「花鳥風月」「仁淀川」などをテーマにしてフィールドにレンズを向ける。以降、海や川などの水系を撮る写真家として現在に至っている。最近は無限に変貌する水の姿を捉えようと、動画撮影にも力を入れている。さきごろ放映された。NHKスペシャル 仁淀川 青の神秘／究極の青「仁淀ブルー」の主人公である。

梅原　真　梅原デザイン事務所代表

1950年高知県生まれ。4kmの砂浜（旧大方町）を美術館に見たてた「砂浜美術館」をプランニング。四万十川流域で販売するものはすべて古新聞で包もう！をコンセプトに「しまんと新聞バッグ」をプロデュース。現在、東北支援プラン進行中。「高知県の森林率84%は日本一」。森を「84はちよん」と愛称で呼び、タノシム「84はちよんプロジェクト」を2009年8月4日「はちよん会議」にてスタート。

鎌田 勇人　大月町立大月小学校長

1959年、宿毛市生まれ。大月町立柏島小学校をスタートに、宿毛市、四万十市等で勤務する。前任校では昨年度で休校となった、全校6名の四万十市立口屋内小学校で小規模校の特性や地域の素晴らしい環境を活かした教育活動を行う。昨年から大月町立大月小学校勤務。常にめざしている経営ビジョンは、学校に関わるすべての人々が幸せを感じられる、そんな『最幸の学校』をつくること。
『今日も　笑顔で　元気です！』

神田　優　NPO法人黒潮実感センター長

1966年、高知市生まれ。高知大学農学部栽培漁業学科卒業後、東京大学海洋研究所で大学院博士課程修了。農学博士。専門は魚類生態学。高知大学客員准教授、神戸大学非常勤講師兼任。高知県柏島に“島が丸ごと博物館”という構想の元、2002年NPO法人黒潮実感センターを設立。島の自然と人の暮らしが両立する、持続可能な里海づくりに挑戦中。

パネルディスカッション　コーディネーター

竹内　一　高知新聞社

1968年、高知市生まれ。学習院大学法学部卒。92年、高知新聞社に入社。学芸部、編集部、須崎支局長などを経て、現在は社会部記者。社会部では連載「高知EV近未来」、「淋しいひまもない一生誕150年牧野富太郎を歩く」（連載中）を手掛ける。

R100
古紙配合率100%再生紙